

4 銀河鉄道の夜

(テキスト原文…宮沢賢治 作曲…信長貴富)

宮沢賢治について

一九八六年、岩手県に生まれる。子供の時から自然が大好きで、鉱物採集などに勤しんでいたという。また、懲罰で廊下に立たされている友の持つおもりを軽くしてやったりなど、昔から慈悲深い人間であった。

中学に入っても自然への興味は尽きなかった。その後は農学校に進み、非常に優秀な成績を残して研究員として残留する。彼はこの頃から日蓮宗を信仰し始めていく。父親が浄土真宗の講師であったことから彼の家には浄土真宗の僧が多数やってきたが、肉欲にまみれた者も存在し、賢治の肌には合わなかったこと、(悪人正機を唱える浄土真宗は規制が緩い)またその時代には内村鑑三をはじめとした有名宗教家による、日蓮宗による世界主義が勃興していたこともあって、賢治は日蓮宗にのめり込んでいく。その後妹の看病をするために東京に行ってたくさんのことを学んだが、岩手に戻った後は親との宗教観の違いから家出をしたりなどもした。彼の不思議なところはそれでも父親を気にかけて続けたことである。日蓮宗の忠孝の考え方を最後まで忠実に守っていた影響だと考えられている。そして彼はその後花巻で教師をすることとなる。

そんな中、最愛の妹であるトシが亡くなってしまふ。この時、賢治は深い悲しみにくれながらも、その気持ちをトシ三部作(松の針、永訣の朝、無声慟哭)に収める。向こう長い間、彼は詩作を一旦やめてしまふ。

その後賢治はほとんど趣味で農業を始める。羅須知人協会を作り、管弦楽を地域の人間と楽しんだりもした。この頃に有名な「春と修羅」などの詩を書いている。またその後学校教師を辞めることになるが、その時は「生徒諸君に告ぐ」を発表している。

その後は東北噴石工場の技師として働いたり、農民の農業に関する相談を聴きながら過ごす。無理がたたり途中から寝たきり生活が始まってしまふ。そして最後の日、彼は農民の相談をたつぷりと聞いた後急に体調を悪くし、読経をしながら臨終したという。

彼の生涯は、宗教観に起因する独特の世界観の中で展開されている。彼の詩への取り組みかたの姿勢として現れているのは「心象スケッチ」という言葉である。これは彼が春と修羅を書いた時についていたことなのだが、自分の詩は詩ではなく、その

時々の自分の心象を捉えた心象スケッチであると自ら述べている。普遍的な現象として存在することを賢治は望んでいるのだ。

この曲について

宮沢賢治の信長貴富の組み合わせは六連期でもしたため、この曲は早いうちに候補に上がっていたものの、なかなか上位6位にランクインすることはなかった。しかし、音源を頂いて気づいたのだが、この曲は春と修羅とは全く別タイプの信長作品であり、とても面白いと感じたため今回選曲に入れた。

この曲は銀河鉄道の夜の話の本編を曲にしているのではなく、(という用語弊があるのだが)まとまるとってきているのは宮沢賢治の他の詩集からで、本編から細かい語句を集積して散らすまさに「音画」というタイトルにふさわしい構成になっている。

ここで参考までに3秒でわかる銀河鉄道の夜を竹村的に要約してご紹介しておこう。主人公のジョバンニには心の中で通じあった友達カムパネルラがいた。しかしジョバンニはその貧乏さから他の友達には嫌われ、ネタにされていたので、カムパネルラも普段はいじめっ子の側に立ち、申し訳なさそうにジョバンニを見ているのであった。

そんな中、一年に一度の星のお祭りの日がやってくる。ジョバンニはお母さんのためにミルクを取りに行くのだが、そこでいじめっこの筆頭ザネリの率いる集団と鉢合わせてしまう。そこにはカムパネルラの姿もあったのだ。悲しくなってしまったジョバンニは丘に行く。すると気づけばジョバンニはカムパネルラと一緒に汽車に乗っていたのだ。そして不思議な旅が始まっている。彼らは知らない間にポケットに特別なチケットを手に入れており、電車に乗ることを許されていた。途中下にも書いたが、鳥を撮る不思議な男や、泣き崩れながら天上に消えるお姉さん、色々な不思議な人にあいながらも電車がつねに揺れる状態で物語は進行して行く。

しかし、最後、ジョバンニがいつまでも一緒だとカムパネルラにいったところで、彼の姿はなくなってしまう。絶望したカムパネルラは我に帰る。現実にもどったジョバンニは川で大騒ぎする大人たちの姿を発見する。カムパネルラがザネリを助けるために川に入って行方不明になったとのことだった。この話は彼の死を暗示させて幕を閉じる。彼らの旅した銀河鉄道はどこへ行く列車だったのだろうか。

譜面について

この曲は大変音が多く、譜面を見ると少し引いて見てしまう人が多いかもしれないが、よくよく見て見ると単純な音の重なりの上に成り立っており、なんなら同じ音で違うリズムの部分も多く、そこまで臆することはないと思われる。

「この曲は信長先生のいわゆる『機能的、技法的作品』であると言える。ドップラー効果、隠されたメロディー（星めぐりの歌）、スライドする擬音。銀河鉄道の夜は終始鉄度が動く中で様々な人と共に展開される物語だが、その描写の多様さが本当に歯切れよく流れてくる。かなり力の入った秀作で、この曲が世に出ていないのは個人的には疑問である。

銀河鉄道の夜には途中で鳥を捕まえる男が出現したり、昇天を予感させる駅での別離など、たくさんの天の描写が成されていることにも魅力があるが、曲中での「ハルレヤ」に象徴されるように、この曲は本当に美しく情景を描写している。